S. Ashina

＜前回：科学論の神学・パネンベルク＞

（１）科学論の神学

１．現代神学後半（1970 年代から現在）の諸動向で。
「解放の神学」系の問題と、「科学技術とキリスト教」系の問題。

２．弁証法神学から再度自由主義神学的問いのテーマ化。
近代文化（近代的諸学）の中におけるキリスト教（神学）、神学の学問性という問題

３．未分化→分化・内的緊張→分裂→対立→無関係・分離→対話・協力あるいは再統合
17、18、19、 20 世紀 1970 年代

５．現代の状況あるいは２１世紀の方向性（未決定）
(1)過去（19 世紀・対立）への逆行
(2)20 世紀的現在（無関係・分離）の反復
(3)新しい関係構築（対話・協力・再統合）、現代のキリスト教思想の全般的動向

（２）パネンベルク

６．歴史学とキリスト教信仰：弁証法神学を乗り越える試み。
パネンベルク、「啓示に関する教説についての教義学的諸命題」（『歴史としての啓示』聖学院大学出版会）（1961）
命題一：聖書の証言に従えば、神の自己啓示は神顕現のように直接的ではなく、神の歴史行為によって間接的に生じた。
命題二：啓示は啓示的歴史の始めにおいてではなく、終わりにおいて見いだされる。
命題三：歴史の啓示は、神性の特殊な顕現とは異なり、見る目を有するすべての人間に開かれている。それは普遍的な特色を持っている。
命題四：神の神性の普遍的な啓示は､なおイスラエルの歴史においては実現されておらず、そこにおいて、全歴史の終わりが先取りとして生起しているという限りにおいて、ナザレのイエスの運命の中ではじめて実現した。
命題五：キリストの出来事は、孤立した出来事として、イスラエルの神の神性を啓示しているのではなく、キリストの出来事が、イスラエルとの神の歴史の一部である、という限りにおいて、神の神性を啓示しているのである。
命題六：異邦人教会における非ユダヤ的啓示表象の形成には、イエスの運命における神の終末論的な自己証示の普遍性が表現されている。
・森田「彼のテーゼンした個々のテーゼは、きわめて論争的な性格を示し、その当時まで主流をなしてきたバルトとブルトマンに対する批判を示唆」、「とりわけ将来的終末論と、終末の先取としてのキリストの出来事だけが強調される評価態度」（177）

７．『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。
『学問論と神学』『人間学――神学的考察』における神学の学的基礎の議論に基づいて、『組織神学』（全三巻）へ。包括的な問題状況を視野に入れて神学を構想する。

８．『学問論と神学』教文館（1973）。
序論　学問論と神学
第一部　諸学問の統一性と多様性の緊張における神学
第二部　学問としての神学
　第四章　神学史における学問としての神学の理解
　第五章　神についての学問としての神学
　第六章　神学の内的区分
・森田「分析哲学、とりわけＫ・ポパーの批判的合理主義の哲学に深い共感を示し、いわば構造主義的機能主義の神学とも言うべき性格」「現代のサイバネティクスへの深い関心を示す神学探究方法」（177-178）

「神についての＜科＞学」(178)というパネンベルクの主張。 cf. トランス、ヒック
「神は、他の経験対象と共に措定される（mitgesetzt）意味総体性(Sinntotalität)であり、「いっさいを限定する現実」である。第二に、神は間接的に、反省を通して論証され把握される。」(179-180)
「神学はこの主張命題を素材として、対象たる神の意義連関と、神についての諸言明との首尾一貫した究極的意味連関とを探究する」、「直接的な宗教経験は」「神学的地平から脱落することになる」(181)
「神は他の対象を超えつつ共に措定される対象であるが、しかも神学的言明はつねに「仮説」(Hypothese)にとどまる」、「ポパーやH・アルバートの批判的合理主義が意味する「仮説」とほとんど同じ」(182)
「しかし、神の自己告知についての言明も、経験における真理性の証示も、共に未完結であり、その最終的帰結はなお将来に開かれている。そのかぎりでは、神思想はなおも未完成であって、絶対的真理そのものではなく、絶対的真理を目指す仮説にとどまり、なおも無限の試行錯誤の可能性をふくんでいる。仮説とは、神思想の探求の途上にあることを意味する。」(183)
↓
歴史の全体、宗教史が問題となる。
９.『人間学――神学的考察』教文館（1983)。
『組織神学』全三巻（1988/91/93）
10. 現代思想（哲学）と自然科学という文脈での神学
『自然と神――自然の神学に向けて』教文館（テッド・ピータース編、1993）
編者による序論――神学と自然科学におけるパネンベルク（テッド・ピータース）
第 1 章　科学者に対する神学的問い
第 2 章　創造と近代科学
「神学者としてのわれわれの務めは、あるがままの自然科学に関係を持つことである。われわれ自身の科学を作ることはできない。しかも、もしわれわれが自然を適切に理解すべきならば、われわれは科学が与えるものを越えなければならず、また神の理解をも含めて考えなければならない。」(82)
11. 社会科学や人文科学への広がりが弱い。

９．エコロジーの神学１――マクフェイグ

１．フェミニスト神学キリスト論：
キリスト象徴の具体的内容（男性としてのイエス）をどのように評価するのか。
キリスト象徴の具体的内容は神学的には二次的なものにすぎないと判断してよいのか。
↓
神やキリストの男性としての象徴的性質は歴史的文化的な諸条件に規定された偶然的なものであり、原理的に考えれば、キリスト教にとって、神は父なる神ではなく母なる神でもよかった、神の子キリスト･イエスは男性ではなく女性でもよかった。
デイリは当然このように主張するだろうし、またリューサーも先の引用の範囲で見れば、これに同意するように思われる。
↓
２．しかし、宗教が抽象的な哲学思想や倫理思想とは違って、具体的な象徴体系によって構成された意味世界であることから判断するならば、象徴の具体的内容はそれぞれの宗教にとってその本質に関わる意義を有していると考えるべきではないだろうか。
それとも、このような疑問を発すること自体が、男性的イメージに固執する古いキリスト

教の名残と言うべきなのであろうか。

（１）方法としての隠喩・モデル論

(1) 言語世界／心的世界／実在世界（日常性・生活世界など）／宗教言語の指示世界における隠喩、モデルの位置づけ。

経験／隠喩／概念：
記号／意味／指示：
語／隠喩／テキスト：言語の諸階層１→連辞
隠喩／モデル：言語の諸階層２→範列
↓

・syntagm（連辞）〈metaphor-narrative〉→パロール→諸要素の結合規則とその構造
線的、連鎖的な言述順序。テキストは全体として連辞と見なされる。連辞内の諸要素が、前後の諸要素との関係でそれぞれの価値を獲得する。

・paradigm（範列）〈metaphor-model〉→ラング
特定の構造によって特徴付けられた体系内の他の諸要素との関係。テキストはこの体系に属する諸要素の部分的な表出。所与の体系に所属する諸要素の集積が範列。

Daniel Patte, What is Structural Exegesis ? , Philadelphia, 1976.

(2) モデル：隠喩を構成要素として成立する上位の構造体。隠喩から構成されるの範列的秩序。モデルは、根底的隠喩（root metaphor）を核として、その周りに類似した隠喩を結合している。一定の隠喩表現を核としてその回りに構成された隣接する隠喩群・隠喩群のネットワーク。

３．マクフェイグの隠喩神学：
神学における象徴や隠喩の意義を論じ、その上でフェミニスト神学の問題にも論究。

４．神学する新しい感受性
・「相関の方法」（ティリッヒ）：問い（状況）と答え（メッセージ）
・神学が神学として成り立つための条件の一つ：時代状況に対する適切な感受性を有していること。

マクフェイグ、三つの「新しい感受性」（McFague, 3-28）

1) すべての生命体と我々人間の本質的な相互依存性についての全体論的でエコロジカルな意識
2) 地球の運命、とりわけ核のホロコーストに対する人間の責任の自覚
3) 人間が構築する思想はすべて隠喩的であり、それゆえ部分的で不確かな性格を免れていないという意識。

3) → 神学思想もそれが人間の営みである限り、隠喩的性格を免れることができず、素朴実在論に基づく神学的教説の教条主義的絶対化は不可能である。
↓
神学者は、「神」などの基本概念が人間のイマジネーションに深く根ざす象徴・隠喩・モデルという基盤の上に成り立っていることを十分に自覚しなければならない（神の象徴・隠喩・モデル→神概念→神論・倫理）。
象徴や隠喩に依拠しない神自体についての直接的で絶対的に確実な理論を所有できるというのは幻想である。

５．神学言語の隠喩的性格
・神学的概念や理論体系は象徴･隠喩・モデルに基づいている。
＝神学が展開する神論は「神」についての部分的で間接的な真理にすぎない。

↓

フェミニスト神学が伝統的なキリスト教神学の神論やキリスト論を批判する際の理論的基盤となりうる。素朴な絶対性の主張を無効にする（神学言語の隠喩性の持つ否定的な側面）。

・マクフェイグ：神学言語の隠喩性の持つ積極的側面

神学の言語表現が象徴的で隠喩的であることは、宗教的実在について現実的に語る具体的な仕方を示している。

・「神学とは構成的で隠喩的なものであるが、それは＜非神話論化＞を行うのではなく、＜再神話論化＞を行うのである」（ibid., 32）。神話的であることの積極的な意味の再発見。

・キリスト論にとってキリストの具体的なイメージの内容は原理的に二次的な意味を持つにすぎないのではないか、という先の問い。

神学は個々のイメージの具体的内容の意味を正しく理解しなければならないと答えられる。

男性としてのイエスがキリストであるということ、神が父なる神として告白されてきたことは、信仰と神学にとってどうでもよい事柄ではないのである。

６．隠喩とモデル（cf. リクール『生きた隠喩』岩波書店）

・隠喩：語のレベルでの意味の移動（多義性）に還元できるものではなく、むしろ経験の拡張に関係する文（判断、解釈）のレベルの言語現象。

↓

隠喩の問題は語の装飾の事柄である前に基本的には認知の問題であり、注目すべきは隠喩における経験の記述機能（経験のコピー）ではなく、新しい事態を自らの経験世界に媒介し経験を拡張し変革する機能。

・「神は我々の母である」という表現は、それが隠喩として成功する場合には、「神は我々の父である」という伝統において成長した人間に対して、新しい認知を生み出し既存の経験世界を変革する機能を果たす。

・モデル：一定の類似性によって隣接した隠喩群（隠喩的ネットワーク）、

隠喩が文のレベルの言語現象であるのに対して、隠喩よりも範列的に上位レベルの言語現象と考えられる（この点、マクフェイグの議論は不十分）。

父なる神という神モデル：創造者、助け主、救済者などの隠喩表現が属する。

主なる神という神モデル：王、審判者、至高者といった隠喩表現が属する。

・隠喩：実体的な同一性の主張ではなく、それが指示する対象との類似性の発見。

＜ではない＞＋＜である＞。

「それは定義（definition）としてではなく適切な説明（account）としてなされるのである。すなわち、＜神は母である＞と言うことは、神を母と定義したり、＜神＞と＜母＞という用語の同一性を主張したりしているのではなく、我々がどう語ってよいのかわからな　い事柄をー神に関連してー母という隠喩を通して考察していることを示唆している　のである」（ibid., 33-34）。

７．隠喩・モデルの複数性

・キリスト教の伝統の中には、神あるいはキリストに関して、多様な隠喩表現やモデルが存在してきた。

ティリッヒ：正統教義において使用される隠喩表現として、主なる神と父なる神という二つのグループ（芦名、1995、296-302　cf. Tillich, 1951, 286-289）。

リューサー：神秘主義や預言的終末運動における女性的イメージ

・同一の対象に対して異なった複数の隠喩表現あるいはモデルが適用されることは論理的矛盾ではない（神の異なった諸モデルの間には、異なった神概念の場合とは違って、論

理的排他性を設定する必要はない)。

隠喩あるいはモデルとは、本来不適当な､部分的かつ不十分な語り方。

「語りうる最大のことは､＜神－世界＞関係の一定の局面あるいは諸局面がこれこれのモデルによって特定の時間と場所にふさわしい仕方で照らし出されているということなのである」(ibid., 38-39)。

・隠喩とモデルの複数性・多様性は単一の隠喩表現に単純化できない。

モデルの複数性は同一の神に対する人間の関わり方の歴史的文化的な多様性に即応している。

・問われるべきこと：どれか一つのモデルのみを絶対化し、他のモデルを排除することではなく、それぞれの歴史的文化的状況に対してどのモデルが相応しいのか、個々のモデルがキリスト教の伝統においてどのように機能してきたのか、を的確に判断すること。

「隠喩神学は多元主義的である」(ibid., 39)

・マクフェイグは現代の状況において神の女性モデルの方が伝統的な家父長モデルより適切であることを、彼女自身の宗教経験を踏まえつつ、強く主張する。この点でマクフェイグはフェミニスト神学に大いに共感を感じている(ibid., xiv)。

しかし、

神の女性モデルがあらゆる歴史的文化的な状況に対して絶対的に正しい唯一のモデルであることは、マクフェイグの隠喩神学の立場ではあり得ない。この点でマクフェイグは急進的なフェミニスト神学と一線を画している。

・問題は、男性モデルを女性モデルに置き換えることではなく、女性モデルに適切な位置を与えることによって男性モデルへの過度の偏りを矯正し､全体のバランスを取ること。

８．隠喩･モデル選択とその条件（伝統と状況）

キリスト教の伝統において神モデルが複数存在し､文化的コンテクストに応じて神経験を表現してきたということは、神モデルはすべて相対的なものであり、どれを選ぶかは個人の好みの問題であるということを意味するのであろうか。

↓

モデルの選択基準、選択の適切性。

マクフェイグが採用する基準は、ティリッヒの「相関の方法」の定式に従っている(ibid.,p.41)。

神学が応答しなければならない状況の分析と、状況に対する応答がそこからなされる＜キリスト教的伝統の究極的規範の理解＞という二つの基準。

↓

キリスト教の伝統の問い直し・再考。リューサーと一致。

（２）エコロジー神学へ

１．モデルに基づく生の形態化→実践

A Christian lifestyle modeled on God as parent, lover, and friend

The Love of God as Mother: Agape

The Activity of God as Mother: Creating、Sophia / Logos

The Ethic of God as Mother: Justice、an ethic of care, justice through care

２．自然の神学：神学的な自然理解→自然観の転換

1)新しい感受性へ：構想力（Einbildungskraft）のレベルでの転換から、存在（Sein）のレベルでの転換へ

A new shape for humanity, a new way of being in the world

We are as members of God's body qualified by the liberating, healing, and inclusive love of Christ. （1993, 197）

to change consciousness, to develop a new sensibility,

thinking differently, behave differently

each model contains within itself a way of being in the world. （203）

2)創造の善性：人間から被造物全体へ拡張

My suggestion is that we should relate to the entities in nature in the same basic way that we are supposed to relate to God and other people.

We read in Genesis that God looked at creation and said: " It is good"---- not good for people or even for God, but just good. We should say the same thing. If we did so, we would simply be extending Christianity's own most basic model, the subject-subjects one, to nature. （1997,1）

The ecological model says that the self only exist in radical interrelationship and interdependence with other and that all living and nonliving entities exist somewhere on this continuum. In other words, everything is in some sense a "subject" ---- an entity that has a center, a focus, an intention in itself, for itself（often an unconscious one）, but it also at the same time in radical relationship with others. （2）

The basic model in the West for understanding self, world, and God has been "subject" versus "object." Whatever we know, we know by means of this model: I am the subject knowing the world（nature）, other people, and God as objects.

nature has become the object par excellence. nothing but object （7）

hierarchical dualisms: male / female, straight / gay,whites / people of color,

Westerners / Easterners

The first named is the subject, the second the object.

Objects are "things" （8）

西欧ヒューマニズムの功績と限界、たとえばカント

3)「自然」とは？　　自然の問題は自然観の問題となる。

If "Christian" has many meanings, "nature" has more.

there will be many views of what nature is, depending on different historical, cultural, geographical, political. economic, and personal contexts.

In other words, nature is not one thing, but many things. （17）

nature is constructed by us. （20）

the big answer, the worldview

the medieval picture, the Newtonian view of nature, ecological model

the ecological,evolutinary understanding of nature

the small answer, nature in the near neighbor

（23）

Im sum, a Christian nature spirituality is Christian paraxis extended to nature. It is becoming sensitive to the natural world, acknowledging that we live in this relationship as we do also in the relationships with God and other people. It means extending the way we respond to God and other people --- as subjects and not as objects --- to the natural world.

as valuable in itself, as a "subject" （25）

subject-object & subject-subjects

4）注意と愛

Simone Weil deepens the meaning of pay attention with her comment that "absolute attention is prayer."

We are asking the question, how should a Christian love nature ? The answer emerging is that we must pay attention --- detailed, careful, concrete attention --- to the world that lies around us but is not us.

We must, as Murdoch says, try to see "the world as it is " in order to love it. To really love nature, we must pay attention to it. Love and knowledge go together; we can't have the one without the other. (29)

I would like to suggest that a branch of science, nature writing, can help us learn to pay attention. The kind of paying attention that one sees in good nature writing suggests a paradigm for us. Nature writing is not scientific writing that hides behind pseudo-objectivity; rather, it combines acute, careful observation with a kind of loving empathy for and delight in its object.

It is a knowing that is infused with loving, a love that wants to know more.

5）二つの目（視線）のあり方

two very different ways of seeing the world (30)

Seeing Ellery and seeing the earth from space: behind these two very different ways of seeing. of paying attention, lie two different ways of knowing: what one commentator calls "the loving eye" versus "the arrogant eye." (32)

The arrogant eye simplifies in order to control, denying complexity, since it cannot control what it cannot understand. (33)

good for me and their human beings

The loving eye is not the opposite of the arrogant eye: it does not substitute self-denial, romantic fusion, and subservience for distance, objectification, and exploitation. Rather it suggests something novel in Western ways of knowing: acknowledgement of and respect for the other as subject. (34)

the distant eye, the arrogant eye, the eye that can objectify the world. This eye lies behind the Western scientific understanding of objectivity.

Feminists and others have criticized this view of objectivity, seeing it as a mask for Western male privilege as well as for technological exploitation of women and nature. (36)

practicing the loving eyes, that is, recognizing the reality of things apart from the self and appreciating them in their specialness and distinctiveness, is a critical first step.

it suggests a different basic sensibility for all our knowing and doing and a different kind of knowing and doing. (37)

6）ケア倫理：権利とケア

an environmental ethic of care

A rights ethic seeks to extend the rights accorded to human beings since the Enlightenment --- the right to "life, liberty, and the pursuit of happiness --- to all animals and even forests, oceans, and other elements of the ecosystems. A rights ethic functions on the model of the solitary human individual.

A care ethic is based on the models of subjects in relationship, although the subjects are not necessarily all human ones and the burden of ethical responsibility can fall unequally. The language of care --- interest, concern, respect, nurture, paying attention, empathy, relationality --- seems more appropriate for human interaction with natural world, for engendering helpful attitudes toward the environment, than does the fights ethic. (40)

It appears to be, for Jesus is reputed to have made the classical subject-subjects statement when he said, "Love your enemires." Treat the person who is against you, perhaps even out to kill, as a subject, as someone deserving respect and care, as the Good Samaritan treated his enemy in need. The subject-subjects model is counter-cultural: it is opposed to the religion of Economism, to utilitarian thinking, to seeing the world as for me or against me.

Christianity is not easy religion. (41)

（３）ケアの倫理

・Caring は、人間形成＝教育(Bildung)の問題となる。

・Nel Noddings, *Careing. a feminine approach to ethics and moral education*, University of California Press, 2003(1984).

・川本隆史「ニーズを論じあることとは、どんな人間のつかがりを創り出すのか――公共性と倫理」(安彦一恵／谷本光男編『公共性の哲学を学ぶ人のために』世界思想社、2004 年。)

＜参考文献＞

１．Sallie McFague, *Models of God. Theology for an Ecological, Nuclear Age*, Fortress Press, 1987.
, *The Body of God. An Ecological Theology*, Fortress Press, 1993.
, *Super, Natural Christians. How we should love nature*, Fortress, 1997,

２．Paul Tillich, *Systematic Theology, vol.1*, The University of Chicago Press, 1951.

３．芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994 年。
『ティリッヒと弁証神学の挑戦』創文社、1995 年。
『自然神学再考』晃洋書房、2007 年。